

## 第1回横浜トリエンナーレ 2011 トリエナーレ学校

### 【「第1回」トリエンナーレ学校の意味するもの】

今回、「第1回」横浜トリエンナーレ 2011 トリエナーレ学校という名称とさせて頂きました。実はトリエンナーレ学校は今年すでに4回開催しておりまして、なぜ今回が第1回目なのか疑問に思われる方もいらっしゃると思います。

横浜トリエンナーレ 2011 の開催決定に伴い、総合ディレクター、アーティスティックディレクターなどぞくぞくと決まっていく中で、サポーターと一緒に取り組む活動の内容や方向性というのがだんだん見えて来ました。そこで、横浜トリエンナーレ 2011 に向けて、サポーター活動をみなさまと実施をして行く為に、まずは学ぶ機会としてこの横浜トリエンナーレ学校を開催し、学校のプログラムもサポーター活動に沿ったもので構成をしました。そういった意味で今回、「第1回」という名前にさせて頂きました。

### 第1部：逢坂恵理子総合ディレクターのお話

水曜日という週のなかばですが、本日はお集り頂きまして、ありがとうございます。

今年、4回程サポーターさん達への勉強会を行いました。アーティスティックディレクターの三木さんが決定したりと実際に動き出したのが最近です。すこしづつ具体的な事をお話していきたいと思いますが、本日は横浜トリエンナーレ 2011 に向けてのおさらいということで、お話を聞いて頂ければと思います。前回、私がボランティア解題というレクチャーを行いました。その時にお話した事を繰り返す事にもなりますが、改めてお聞き頂ければと思います。

### 【横浜トリエンナーレ 2011 概要】

横浜トリエンナーレは10月1日にキックオフしました。記者会見に発表した概要を説明します。会期は8月6日から11月6日です。今までの横浜トリエンナーレは秋だったのですが、8月6日の夏休み期間を会期の最初にもって来ました。これは小学生以上の学生や親子連れの方に積極的に来て頂きたいということもありまして8月に設定をしました。今年の夏は非常に暑かったので、来年は涼しい夏になればいいなと思っています。主会場は横浜美術館、日本郵船海岸通倉庫 (BankART Studio NYK)、それからその他の周辺地域となっておりますが、横浜市の中で様々なNPOや大学の活動がありますので、そういった活動をなさっている組織の方たちとも連携したいと思っております。主催は横浜市、NHK、朝日新聞社、横浜トリエンナーレ組織委員会で、以前は、一番最初に国際交流基金が入っていました。今回は基金が主催者に入らないことが大きな変化です。共催は公益財団法人横浜市芸術文化振興財団で、こちらは横浜美術館をはじめ、みなとみらいホール、横浜能楽堂など横浜の文化施設を司っている公益法人です。私が全体を見る総合ディレクターで、アーティスティックディレクターにはパレ・ド・トーキョーというパリにある現代美術センターでチーフキュレーターをされていた三木あき子さんをお願いをしました。彼女は現在パリに住んでいまして、つい10月下旬まで担当していた展覧会を取り仕切っていました。今後は何度か来て頂いて、会期の直前にはまとめて滞在し、展覧会を構成していくこととなります。

### 【横浜トリエンナーレ 2011 の意義】

～横浜トリエンナーレ開催のきっかけ～

全世界で、トリエンナーレやビエンナーレといった大型の国際展は60ほどあります。

一番古いのはヴェネチア・ビエンナーレです。1895年に始まり、100年以上続いています。ヴェネチアがスタートして以降、世界で80以上の大型展が各地で開催されるようになりました。その間に終わったものもあり、現在は60くらいだと思います。日本では、横浜トリエンナーレ、あいちトリエンナーレ、越後妻有アートトリエンナーレの他にも版画の公募展や大阪でもトリエンナーレが開催されていまして、東京ビエンナーレというものもありました。ですが残念ながら10年以上続く国際展はなかなかないんです。日本では10年続くと段々と消滅してしまう傾向にあったんですね。横浜トリエンナーレは2001年にスタートしたので、来年で10年目です。とりあえずは10年を迎える事が出来ますが、今

後続けていけるかどうかは誰も分かりません。世界各地、日本国内で国際展が開かれている中で、なぜ横浜で現代美術の国際展が必要なのか、私たち主催者はよくよく考えなくてはならないと思います。日本で一番古い国際展というのは1952年から始まった東京ビエンナーレですが、こちらもすでになくなっています。東京ビエンナーレは1970年に非常に大きな国際展「人間と物質」を開催しましたが、それ以前は国際展というよりは小規模な展覧会でした。「人間と物質」は日本の現代美術史に残るようなすばらしい国際展だったのですが、その後継続していくのが難しくなり、中止になってしまいました。当時、読売新聞社が主催していたので、公的な資金を元にして開催してきたわけではありませんでした。横浜トリエンナーレについては、2001年に国際交流基金が日本でも海外に発信出来る大規模な現代美術の祭典を開催すべきだという方針に基づいて、カウンターパートナーである横浜市と共にこの国際展を開催しました。

#### ～横浜の持つ歴史的背景～

では、なぜ横浜で国際展を開催するのか、色んな理由があったかと思いますが私自身、横浜は国際展を開催するのにとてもふさわしい条件があると考えています。その1つは、1859年に開港した横浜の歴史です。19世紀なかばに港が開かれ、政治、経済、文化、人の交流が横浜港を通じて日本に広まってきました。それ以前はたった100戸程しかなかった小さな村だったと言われています。横浜は日本が鎖国を解いて海外に開かれた、歴史とともに発展していった街で、新しい情報、人の交流、異文化の受け入れなどの歴史的な背景があると思います。

#### ～創造都市構想～

横浜市は近年、創造都市構想を推進してきました。消費経済、つまり物質的な豊かさを求めて経済的な発展を続けて、ものを所有することで豊かさを確立していくという製造産業の発達から、創造性（クリエイティビティ）や質を求める価値観へと変換していったのが21世紀に入ってからです。そうして創造産業という考え方が出てきました。これはクリエイターやデザイン、アーティストが生み出すものを産業に転化し、自由な発想や数字では図れない価値観を産業の大きなエネルギーとして都市の再生にも生かしていくという考え方です。

#### ～みなとみらい21地区を核とした構造～

現代美術の場合、新しい表現は都市を中心に発展してきました。みなとみらい21は新しく出来た街ですが、公共交通機関や商業、ビジネス、文化施設がすべて揃い、人が来やすく、アクセスの条件が整っています。このような都市を中心に文化的なものが生まれ、発信されることが近年多くみられるようになってきました。歴史をさかのぼると、古くは19世紀後半から20世紀初頭にかけてフランスが芸術の中心になり、その後アメリカのニューヨークが芸術の中心となったことを考えると、大きな都市が芸術を育てるエネルギーを作り出しています。隔離された都市ではなく、人びとが集まり、色々な条件を満たしている、つまりこの地区が、小規模ではありますが、その役目を果たせる都市だと考えられます。

#### ～国際交流基金から、横浜市へ～

国際交流基金が事業仕分けによって、日本国内での国際事業には関わらず、海外で日本の文化を紹介していく事に、より力を注ぐことになりました。横浜トリエンナーレは国内で行われる国際事業ですので、国際交流基金は主催者に入らないことになりました。この問題は横浜市も含めてずっと協議をしてきて、横浜トリエンナーレ2011が開催されるのかどうか、なかなか結論が出なかったのですが、林市長がコンパクトでも質の高い国際展を開催すると、今年の8月に宣言をして、2011年の開催に至りました。

#### ～横浜美術館を拠点へ～

国際交流基金は芸術交流を中心に様々な国際事業を展開してきた国の組織です。一方、横浜市はアートの力を色々な形に変換しながら都市再生することに力を入れています。国際交流基金から横浜市に主軸が移ると、芸術振興より都市再生の方に主軸が移ってしまうのではないかと考えられます。そこで横浜美術館が1つの主会場として機能し、ソフト面とハード面で大きな役割を果たすことによって、横浜市が掲げるアートを活用しながら都市を再生していく考え方と、芸術振興を核としている横浜

美術館が一緒になり、過去3回続けてきた横浜トリエンナーレが次の段階に入るのではないかと考えます。

ではあいちトリエンナーレとどう違うのかというと、今までの過去3回重ねてきた蓄積があること、都市再生でアートを活用してきた横浜市が横浜トリエンナーレを開催することが大きく違うと考えています。

2011年が1つの正念場です。ここをどう乗り切るかで2014年、2017年へと繋がっていくかどうか、私自身はかなりプレッシャーを感じながらも、来年を乗り切りたいと思っています。

#### 【横浜トリエンナーレ2011について】

～世界をどこまで知ることができるか～

横浜トリエンナーレ2011に関して、具体的なアーティスト名はまだ出すことはできませんが、1つの考え方として、世界をどこまで知ることが出来るか、ということアーティストディレクターの三木さんが掲げています。これがそのまま横浜トリエンナーレのタイトルになるわけではありませんが、アートを通して人間や世界の奥深さを知ることを目指しています。アートは、新しく生まれた技術や科学の発展によって美術の表現も変わってきている訳ですね。ですが、いかに技術や科学が発展しようと、私たちの知ることのできないものが存在する訳です。そういったことを教えてくれるのもアートなので、来年の横浜トリエンナーレでは科学の発展も示しながら、人智を超えたもの、不思議なものの存在を伝えていきたいと思っています。

それから自分の目で美術作品を見ることが奥深い経験になり、作品の背後を読み取る読解力を鍛えられるような機会となってもらいたいと思います。

また、現代に限らず古今東西の作品や横浜美術館で開催するので横浜美術館のコレクションを含んで全体を構成していきたいと考えています。現代美術の新しい表現や多様な表現を知る上でも、古い作品を組み合わせながら、アートの力を体験できるようにしたいと思っています。

～3つの柱「みる」「そだてる」「つなげる」～

それから、3つの柱というのを考えています。「見る」「育てる」「つなげる」という考え方です。

「見る」というのは目で見るだけでなく、感じる、知る、体験することも全部含めていまして、自分の知覚と知識を総動員しながら、体験的にアートを楽しんでもらう。これを「見る」という言葉に集約しています。

「育てる」というのは、横浜トリエンナーレが開催されることで、子供や若手の人材、市民サポーターの育成が促進できるようなプログラムを組んでいきたいと思っています。「つなげる」とは、横浜美術館を拠点とはしますが、地域の広い意味での文化芸術の拠点となるように他の教育機関やNPOとの活動をつなげる。そして現代美術だけでなく、古い歴史を感じさせるものを含めて、歴史と現在をつなげる。美術だけではなく、他のジャンルとの交流を意識しながらつなげていくことを考えています。

アートを1つの柱として、点が面として広がっていくような、いわゆる現代美術のファンだけでなく、他の人にも楽しんでもらえるような広がりをもたせたいと思っています。具体的にどういったことをするのかは来年あたりにみなさまにお伝えしたいと思いますが、横浜トリエンナーレは事務局に直接関わっているスタッフだけで全部まかなえるものではありません。横浜トリエンナーレ1回目、2回目、3回目にサポーターに活躍して頂いたように、次回もサポーターの方やボランティアの方に協力をして頂きたいと思っています。では、ボランティアとはどういうことなのかを復習したいと思います。

#### 【ボランティアとは】

～アートボランティアの解題～

ボランティアという言葉は日常使われているかと思いますが、社会貢献を行う人達を意味し、例えば病院やお店でボランティアをした、というときは無償で社会貢献するという意味が強いかと思いますが。英語でボランティアというニュアンスは自発的に何かをする人達のことを指します。ボランティアといったときに英語圏の方は志願兵を思い浮かべます。自ら志願し、戦争に行く志願兵ですね。自ら手を挙げて自発的に何かをするというニュアンスがあると思って下さい。例えば大災害が起きた時に救助を行っ

たり、病院で難病の子供たちのために何かをおこなったりと社会福祉的なボランティアというのは自分で「何か良いことをやったな」とすぐ実感しやすいものだと思います。

アートボランティアというのは、社会福祉的なボランティアとは少し違うと思います。その特徴を挙げますと、「自発性」「無償性」「利他性」。これは自分の為ではなく他者の為にどれだけ役に立っているのかということで、社会福祉的なボランティアだと実感しやすいですが、アートボランティアだとなかなか見えにくいかもしれません。

そして「先駆性」。新しいことに取り組む。「補完性」。普通では出来ないことを相互補完して何かの形にしていく。「自己実現性」。自分で何か表現したい、何か関わりたい、といった自己実現したい何かがあって、それをボランティアの場で実現していくことです。

アートボランティアの方たちに一番大きい動機は「自己実現性」だと言われています。

#### ～ボランティアの意識と責任～

医療や福祉、災害救援、人権擁護、平和の促進など、社会貢献が目に見えて分かりやすいボランティアに比べると、美術界でのボランティアは自分が他の方の役に立っているかどうか、すぐには目に見えないので、アートボランティアとしてその意欲を持ち続けることはそれほど容易くありません。

#### ◆アートボランティアの意欲維持は難しいか

せっかく横浜トリエンナーレに参加したのに、自分が思っていたボランティアとして活躍できないと感じ、途中でやめる方もいらっしゃるのではないかと思います。これは横浜トリエンナーレに限らず、ボランティアの活動というのは自発的に無償で貢献をするものなので、自分の中にはっきりした強い意思がないと、想定してないことが起きた時に、意欲が維持できないことも起きてしまいます。

意欲の維持方法は、1つは主催者側との関係性をきちんと構築していくことです。

私は過去の横浜トリエンナーレボランティアの報告書を読みました。とても驚いたのは数の多さです。今までの参加者のトータル数字を出していますので、実際の参加者の人数とは違いますが、延 1000 人以上の方が横浜トリエンナーレに参加して下さっています。参加した方がボランティアとして参加してよかったと思って頂くように、主催者側が準備することは実は非常に大変なことです。主催者側との関係性については、マスではなく、個人と個人との関係をきちんと構築できるかどうかが大切になってきます。

#### ◆美術を伝える仲介者

アートボランティアの場合にはなかなか成果を実感できないこともある、と言いましたが一方では参加して本当によかったという方も大勢いらっしゃいます。アートボランティアの使命とは何かというと、美術という掴みどころがなく価値基準を与えられないものを伝える仲介者だと思います。例えば受付やチケットのモギリやガイドの方も、多くの方に美術をどう伝えたらよいか考えることが、アートボランティアを維持するモチベーションになると思います。あまりそれが強いと相手が引くこともありますけれども。本日、集まって下さっている方たちは美術に対して、意識の高い方だと思います。ですが美術を好きな方は全人口の 5% いるかどうかです。現代美術だともっと少ないです。今、横浜美術館ではドガ展を開催しています。19 世紀後半の画家として非常に優れたアーティストですが、このドガ展の来館者目標数はかなり高く、30 万人で、主催者は NHK、読売新聞社、横浜美術館です。

横浜トリエンナーレへ 30 万人に来て頂くのはかなりハードルが高い数値で、厳しいと思います。前回の横浜トリエンナーレの数字が何十万人と発表されていますが、複数会場があるので 1 人の方が 3 人分カウントされることもあるわけです。

ドガ展の様に、横浜美術館だけで 30 万人の方に横浜トリエンナーレに来て頂くのは、非常に大変です。その中で、美術館のスタッフだけが横浜トリエンナーレのことを頑張って伝えようとしても限界があります。

一般市民の方、ボランティアの方に横浜トリエンナーレのことを伝えてもらい、専門家の目線ではなく一般市民の目線で「この間行ってきたけどおもしろかった」と伝えてもらえるだけで全然違います。ボラ

ンティアで参加して頂く場合、参加者1人1人がメディエーター（仲介者）として、力を発揮して頂けるのではないかと思います。

#### ◆伝統的なコミュニティの崩壊

近年、伝統的なコミュニティが崩壊しています。老若男女、世代がまったく違っていても、何か1つの事に共感する人たちの集まりが希薄になってきています。それをアートボランティアの方たちがアートを介したコミュニティを形成してくれる可能性は高いです。同じ様なものが好きで、同じ様なタイプの人たちが集まるということではなく、社会的な上下関係もなく、違う世代や男性、女性、日本人や外国の方、みんなが1つの現代美術を伝えていくとの思いで集まって協働するという事は非常に重要で、そこで得るものも大きいかと思います。同じアート作品を通して1人1人感じることは違う訳ですから、同じ考え方を持つ人もいれば違う考え方を持つ人もいる、そういった共通点を持ちながら異質なのも受け入れていくことが非常に重要ではないでしょうか。

#### ◆「Outcome」という、ボランティアの理想の形

ボランティアとしてどんな形で関わられるのか、色々なやり方があるので、参加しやすい形で無理をしないで参加して頂くのが一番だと思います。

インカム、アウトプット、アウトカムとありますが、理想はアウトカムですね。

インカムは一方通行的で自己満足です。受け身で、これをやって下さいということを受けて、それを出来たから自己満足を得るということです。

アウトプットというのはより自発的に自分から発信していくこと。

アウトカムは出して戻すということなので、自分から発信するし、何かを受ける、アウトカムの状態をみなさまが体験できると理想的なのかなと思っています。

#### ◆アートを介して何を学ぶか

アートという1つの核を中心に集まって、アートを介して何を学ぶかですが、それは異なるものを受容していくということです。異質に交わり、異質を許容し、異質に学ぶとありますが、まったく違う価値観や多様性を受容していく。

それから、課題への気付きと解決です。なぜアートなのかと思われるかもしれませんが、自分の目を通して作品をじっくり見ることは、作品の背後にあることを読み解いていく力を得ることなんですね。それを積重ねていくと、周りにある課題に対しても気付き、それをあきらめるのではなく、次にどうやったら良い形になるか考えるきっかけを与えてくれるようになる。

私自身、アートボランティアの理想の形はアートを介して人間らしく生きるためのネットワークをどうやって作っていくかということだと思います。

マスではなく個人個人が自分の中でアートの存在を非常に重要なものとして自分の人生のかけがえのないものとして感じるような、そういった人達を1人でも増やすために、今日参加して下さった皆様がソフトにやわらかく柔軟に対応して頂ける可能性があれば非常にうれしいです。これで時間になりましたので、これで私の話は終わらせて頂きます。

## 第2部：天野太郎サポーター事務局事務局長によるお話

天野：こんばんは天野です。よろしくお願ひします。サポーター事務局事務局長をしております。トリエンナーレの組織委員会ではアーティスティックディレクターの三木あき子さんがキュレーションをされますが、その下のキュレトリアルチームを束ねる仕事も兼務しています。

今回、トリエンナーレ学校を仕切り直しということで、第1回目としております。とはいえ、過去の4回分をまったく無視する訳ではなく、基本的な考え方は踏襲しようと思っております。

先ほど逢坂総合ディレクターからの話もあったんですが、将来に向けての課題として、我々の地域社会が危機的な状況にあること、背景として、子どもの数が減ったりと人口が激減しており、コミュニティ崩壊が、きわめてリアルな話になってきています。その中で、それを新しい時代の課題と考えると、ア

ートはただ鑑賞する対象ではなく、とくに現代美術に関して言うと、実際に存在するアーティストがさまざまな地域に乗り込んでいき、地域活性化をはかるなど、大きな役割を果たしています。これはここ5年くらいのことですが、この様な傾向は将来も続いていくかと思えます。

横浜でも寿町や黄金町など、地域とアートとの関係が新聞でも取り上げられていて、あいちトリエンナーレ総括の記事が先日の毎日新聞に書かれています。会場となった愛知県の芸術文化センター（県の美術館）と名古屋市美術館での展示についてはほとんど触れていなくて、シャッター商店街で繊維街の長者町にアーティストが入って、非常に活性化されたという記事が最初のトピックになっています。

#### 【サポーター活動の内容について】

サポーターのみなさまにお願いしたい大きなものは、広報・宣伝です。横浜トリエンナーレというのは市民のみなさまにまだあまり知られていない。おまけに内容は現代美術ですから、ドガを知っていても現代美術は分からない人がまだまだたくさんいます。蛇足ですが、ドガは19世紀後半のアーティストで、アバンギャルドな前衛の美術家でした。つまり当時はあまり受け入れられなかった前衛的なアーティストでした。われわれが支えるアーティストはまさにアバンギャルドな現代美術の作家になるんですね。

現代美術は難しいと言われますが、知ってみると意外に興味深いですし、いろいろな事を考えさせられたり、新しいコミュニティを作る上でもキーワードになります。様々な角度でトリエンナーレを楽しめるよう、われわれが抽出して、それを広く知らしめていきたい。つまり広報を大きな軸にしたいと思っています。

また、横浜美術館とBankARTStudioNYKが主会場にはなりますが、横浜の良さを来場者に知らしめていく事も非常に大きなミッションだと考えています。横浜トリエンナーレを機会に横浜へ訪れて頂いて、現代美術を新しく知ることや横浜の歴史的なスポットを紹介していくような活動を、市民協働事業の大きなビジョンとして考えていきたいと思っています。

#### ～サポーター規約について～

サポーター規約には、みなさまにお願いしたい具体的な活動をあげました。

横浜トリエンナーレ2011の開催が出来るかどうか分からなかった中で、ようやく総合ディレクター、アーティストックディレクターも決まりました。組織委員会のスタッフもまだまだ足りませんし、年明けにならないと全然揃わないといった事態なんです。とは言え、はっきりとした展示会の内容も示されましたし、方向性も決まって、それを受けて規約を改訂しました。ご理解頂いて、「そういうことであれば、是非力を貸してやろう」と参加して頂ければいいと思っています。

#### ～サポーター活動：横トリおもてなしチーム～

横浜トリエンナーレ2011に、日本全国のみならず海外からの色んな方が来て頂く前提で、来場者へのおもてなしチームを作ろうかと考えています。展示会は8月6日から会期がスタートするんですが、会場内での監視業務やインフォメーション、受付、会場の案内、会場間のアクセスなどの案内などが役割です。また、例えば1月には県立の芸術劇場が出来ますが、そういった新しい文化施設からもトリエンナーレを応援していこうとの声を頂いておまして、お互いに魅力的なプログラムを展開することになるかと思えますが、その施設へのアクセスの案内などもあります。

みなさまはそれぞれの地域にお住まいですが、その地域に関して、よくご存知だと思います。歴史的な遺跡や、エピソードに飛んだ場所があったり、おいしいレストランがあったりと、そんな情報を載せて新しくサポーター自身が作成するようなルートマップの作成やツアーをやって行きたいです。これがおもてなしチームとなっています。林市長もおもてなしという言葉はよく使われていまして、横浜で過ごす事が楽しく、新しい発見もあるということで、横浜を全国に知ってもらいたいということをおっしゃっておられます。そのことにも重なっています。

#### ～サポーター活動：横トリ宣伝チーム～

次に横トリの宣伝チームです。そもそもトリエンナーレとはなんなのか、あるいは現代美術は難しいという方への理解を進めていくような、トリエンナーレの内容に直結したような形で、情報を発信したりですとか、横浜市は18区ありますので、説明会も中区や西区のこのあたりの文化施設に集中しており

ますから、全区できるかわかりませんが、広く横浜市内に出かけて行って、新しいソフトを作って、図版とかツールを使って、広報していきたいと考えています。

～サポーター活動：アーティストサポートチーム～

アーティストのサポートチームですね。色んな形で作品展示がありますが、すでに出来上がった作品をアーティストまたは関係者からそのままお借りするという場合もありますし、横浜市という場所を想定しながら新作を作るアーティストもいるかと思えます。その時にアーティストの制作に参加することもあるかと思えます。先ほどの逢坂総合ディレクターからの話もありましたが、隠しているわけではなく、本当にアーティストが決まっておられません。もうじき12月ですが、まだ決まってないんですね。ですがこのまま進んでいけば1、2月で大急ぎでいろいろ固めて、3月にはほぼ全員、発表出来るかと思えます。その中でアーティストサポートチームが活躍できるようなプログラムが（どれくらい用意出来るかわかりませんが）発生してくるだろうと思われまます。

アーティストが来日したりとか、あるいは国内の作家でいろいろな場所を見てどこで作ろうかと言った時に、直接アーティストから話を聞いて具体的に作品を理解した上で「このアーティストのサポートをしてみたい」となるかもしれません。

～サポーター活動：事務局お助けチーム～

最後に事務局お助けチームです。全体的なスケールは正直、サイズダウンします。

作家の数も40～50作家になるかと思えます。普通は80～90作家くらいが相場ですが、国際交流基金が抜けてしまったことで資金的なこともあり、横浜市一本でやっていくしかない中で厳しい状況ではありますが、実際のオペレーションしていく事務局や学校の運営補助ですね。

#### 【トリエンナーレ学校ラインナップ】

来年3月までの横トリ学校のメニューもチラシに載せています。次回12月1日の横トリ学校は、来年の横浜美術館で個展をする、横浜トリエンナーレ2005年参加作家でもある高嶺さんのトークです。作品の構想中でありまますので、具体的に何をお願いするかははっきり言えないですけれども、おそらく制作補助が発生してくるかと思っています。

3、4回目については、実際の広報のチームを作っていきます。みなさまにルートガイドを作ってもらい、実際にそれを様々な地域で展開を行っていきます。

4月最初の週末に大岡川沿いでは桜まつりというのがあり、晴天が続けば少なくとも5、6万人が押し掛けてきます。黄金町エリアマネジメントセンターと協同して行う予定ですが、そこでの広報活動で自分たちの成果を試そうと考えています。座学が続くのではなく実践的なことをやっていきます。

来年2月の5回目にはアーティストックディレクターの三木あき子さんの話を入れていますが、実際に広報の自分たちのチームで具体的な展開をしていきたいと思っています。そしてトリエンナーレの参加作家、おそらく3月に発表されますが4～6月あたりを使って、そもそもトリエンナーレや現代美術はなんなのかという事について広報をして頂く中で、みなさま自身が作家や作品について理解をしておかないといけない、その為の勉強会をしなければいけないと考えています。

そういった勉強会についても自分たちの勉強も含めてサポート頂ければと思います。

それから事務局の中でいろいろな事務作業や記録だとかイベントもやっていきますが、そういったトリエンナーレ学校以外のプログラムについてのサポートもお願いしたいと考えております。

トリエンナーレサポーター事務局としてはトリエンナーレ本体からの要請を受けていろいろな形で活動を展開していくわけですが、おおきな柱としてはやはり広報ではないかと思えます。この広報も（繰り返してはありますが）広い意味で、横浜市を広く深く知って頂けるようにしないとイケないですし、新しい地域の発見だとか新しい人とのつながりが出てくることで、将来的に新しい地域作りへ繋がっていくような活動をしないとイケないという風に考えています。

横浜トリエンナーレ 2011 は、アートだけを紹介していくわけではなく、広い意味で社会的文脈みたいなものを想定しながら、横浜の魅力を存分にほりさげていくような広報を展開していこうと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

実際に今後ご登録頂いて色々な形で情報を発信していきます。具体的な募集もかけたりします。1つトリエンナーレ学校が大きな情報源の機会になりますし、ワークショップをする場としても、ここを中心にやっていきたいと思っております。

ですが月に1回程度の学校では活動に限界がありますので、まずはチームづくりを始めて、それぞれのチームが個々に活動していけるような方向にもっていきようにしたいと思います。それは4~6月あたりを使ってチームを作っていきたいと思っております。本会場や会場周辺地域、黄金町なども含めたベルト地帯の中で特にみなとみらい、馬車道、日本大通り、中華街も含めて、県民ホールや BankARTStudioNYK がありますが、ひょっとしたらみなさまが知らなかった文化施設もあるかと思っておりますので、それを知って頂いて、せっかく来て頂いた方にみなさまが案内をしてもらえたらと思っております。簡単な説明ではございましたが、今年から来年にかけて最低でも6回のメニューがありますので、それに付随したいろいろな活動を考えております。どうもありがとうございました。

#### 【質疑応答】

参加者：「今話を伺って、サポーター登録をしたいと考えておりますが、時間的にどのくらい要求されるものなのでしょうか、仕事をしながらでも出来るような感覚で良いのでしょうか？」

天野：もちろんそうです。いわゆる仕事ではないので、ここまでしないといけないということはありません。みなさんの許された条件や時間もありませんし、働いてらっしゃる方もたくさんいますので、あくまで出来る範囲でのことです。方向性のお話はしましたが、ここまで達成をしないといけないということにはしません。ただ桜まつりといった大きな催しがあった場合にどれだけ自分の広報活動が成果があるのか、検証する中でゴールというのは設定しようと思っておりますが、ご心配の点は大丈夫です。少なくとも無理を強いる事は致しませんのでよろしくお願いいたします。

参加者：「こういう機会に聞いた事や見たことを自分のホームページであげるなど、知的所有権に関しての扱いはどのように考えたら良いのでしょうか。フリーで良いのでしょうか？」

天野：悩ましいご質問なんですけれども、この間の尖閣諸島の映像も出てくる世の中ですから、口出しするつもりはありません。もちろん奨励はしませんけれども、ですがこのあたりの関係者が出ている内は良いですが、ゲストが来た場合、肖像権で直接訴えられることもあるかと思っておりますので、ご覚悟の上ということになります。程度の問題ですので良識的な範囲でお任せしたいと考えています。

それでは、第1回横浜トリエンナーレ 2011 トリエンナーレ学校を終了させていただきます。長時間に渡りご清聴頂きまして誠にありがとうございました。